障害児教育教員養成課程学生の福祉系職業への就職志望について

真城　知己*・近澤　真由**

（1998年11月30日　受付）

本研究は、障害児教育教員養成課程に在籍する学生の中に卒業後の進路として福祉系の職種を希望するものが増加してきていることをふまえ、今後の学生への進路指導のあり方を検討するための資料を提供することを目的に企画されたものである。

本学の障害児教育教員養成課程に在籍する2回生から4回生を対象にして、「大学入学前に志望していた学部」、「大学入学前に志望していた将来の職業」、「現時点で希望する将来の職業・職種」、「就職に対する意識」、「希望する仕事の性格」、「就職への支援に関わる大学への要望」、及び「就職に向けた準備の状況」に関して質問紙による調査を行った。

その結果、本課程の学生たちは、入学前に志望していた大学の学部が、「教育系学部」を希望していた者と「福祉系学部」を志望していた者とに二分されており、「教育学部でも福祉を学ぶことができる」と考えて入学した学生が約半数ほどをしめていたことがわかった。入学後は教員を志望する学生、それも本課程の特色を反映して「特殊教育諸学校教員」を志望する学生の割合が高まっていく傾向が確認されたが、他方で、採用試験枠の急減を受けて、福祉系の仕事を志望し、その方面への就職情報の提供などを求める傾向が確認された。しかしながら、全体に就職に向けた準備が非常に遅く、早い学年から将来の進路について考えさせる機会を設定する必要性も示唆された。

Ⅰ．はじめに

これまで各教員養成系の大学では各地域に教員を供給する役割を担ってきたが、総合大学などの出身学生の教員への就職者の増加にしたがい、学生の教職への就職率が低下してきている。これに従って、教員養成課程を卒業した後に教職以外の公務員や民間企業に就職する学生の割合が年々高まらざるを得なくなってきている。

障害児教育教員養成課程に在籍する学生の進路の傾向もこの流れの中にあるが、とりわけ教員への就職率の低下は、学生への進路指導の大きな課題の一つとなっている。

大阪教育大学の学生の多くが志望する大阪府及び大阪市では、教員採用試験において特殊教育諸学校教員の別枠方式を採用していないために、大学において学習してきた専門性を採用試験に十分に活かすことが難しいという不利な条件のもとにおかれている。

採用試験における特殊教育諸学校教員の別枠採用の実施状況と、その自治体における当該校教員の盲学校教員免許状、聾学校教員免許状及び養護学校教員免許状の保有者の割合とは明確な関係があることが報告されている。すなわち、別枠採用を行っている自治体における特殊教育諸学校教員の当該校種に関わる免許状の保有率は高く、別枠採用を実施し

* 大阪教育大学障害教育講座　** 知的障害者更生施設あじさい園

ていない自治体では保有率が低いということである。

大阪府は、この別枠方式を採用していないために、府下の盲学校、聾学校及び養護学校教員の免許状の保有率は、全国的に最低の水準にあり、近年では常に全国のワースト５に登場する状況である。近隣の府県でも同様の状況を示しているところが多い。

このように教員採用において専門性を十分に活かした受験ができないという条件は、障害児教育教員養成課程の学生にとって、大きな不利となっている。

ここ数年の本学の障害児教育教員養成課程の現役学生の教員採用試験への合格率はおよそ１割前後を推移しており、大半の学生が卒業と同時に教職に就くことが困難となっている。卒業後に非常勤講師として採用され、再度、再々度と受験を重ねて、正採用に向けて努力を続けている学生たちも少なくない。

こうした学生たちへの支援方策（卒業後のフォローアップ等）について真剣に考えなければならない時期に来ているといえよう。

このように課程本来の役割である、障害児教育教員の養成を一層充実させていくことが必要であるが、例えば平成１１年度の大阪府における小学校教員の採用予定数が５０名で、この値は障害児教育教員養成課程の学生定員さえ下回っているという事実のように、自治体における教員採用の絶対数があまりに少ない事態を勘案すれば、学生たちの間に「何年間も受験し続けても、果たして教員になれるかどうかわからないので、別の進路も考えたい」との声が拡がってくることも受け止めねばならない[1)]。

障害児教育教員養成課程の学生たちは、何らかの形で「障害をもった人と関わりのある仕事」に就きたいと考えている者が少なからずおり、これまでも毎年のように社会福祉施設等へ就職する者が数名程度いた。

こうした状況の中、入学の時点で社会福祉系への進路を希望している学生が少なからずいるという感触があり、これを確認して学生の進路指導に何らかの配慮を検討する際の資料収集が必要であると考えた。

しかしながら、国立大学の障害児教育教員養成課程においては、本学も含めて福祉系の科目を明確に位置づけて用意してきた大学は少なかった。近年、ようやくいくつかの大学において教員養成課程の中に福祉領域の専任教官を配置し、学生への同領域に関する指導を充実させようとする動きが見られるようになってきた段階であり、全体としてはまだ講義体制等が不十分な状況である。

また、就職資料室には、社会福祉系の職業を志望する者を対象とした資料等が非常に少なく、学生たちが利用できる情報が限られており、もし、学生たちの中に社会福祉系への就職を志望する者が多く存在しているのであれば、彼らが利用できる資料等を充実させることが急務となろう。

さて、社会福祉施設における新規職員の採用に目を向けてみると、社会福祉系の学部ばかりでなく、教員養成系の学部出身者が増加してきているようである。利用者へのアプローチなどに関して、教員養成系ならではの学習のメリットが生かされているとの評価も聞かれるようになってきた[2)]。しかし、こうした卒業生には社会福祉サービスやそのマネージメント等についての学習が明らかに不足しているという弱点もある。社会福祉系の職種への就職を希望している学生への今後の支援を考えるため、本研究では、本学の障害児教育教員養成課程に在籍する学生を対象にして就職志望などに関する意識調査を行ったので報告する。

Ⅱ．目　的

障害児教育教員養成課程に在籍する学生の入学前から現在までの進路志望の状況を把握し、今後の進路指導を検討するための資料を得ることを目的とした。

Ⅲ．方　法

1)対象と調査の時期

本学の障害児教育教員養成課程に在籍する学部学生（２～４回生）からランダムサンプリングにより抽出した60名。調査期間は平成10年５月下旬～６月中旬。

2)調査の内容と手続き

対象者に直接依頼を行い、調査用紙に記入してもらった。

フェースシートでは性別、年齢及び学年を尋ねた。

調査用紙本編における質問項目は以下のような項目群から構成した。

「大学入学前に志望していた学部と進学の理由（４項目）」、「大学入学前に志望していた将来の職業（９項目）」、「現時点で希望する将来の職業・職種（１１項目）」、「就職に対する意識及び就職支援に関わる大学への要望（１０項目)」、「希望する仕事の性格（２０項目)」、及び「就職に向けた準備の状況（１０項目)」の各内容で構成した（論文末資料参照)。

Ⅳ．結果と考察

1)回収数と回収率

回収数は５５で、回収率は91.7%(55/60)であった。

2)回答者の属性

表１　回答者の性別人数

	度数	%
男　性	１５	27.3
女　性	４０	72.7
合計	５５	100.0

表２　回答者の学年別人数

	度数	%
２回生	１８	32.7
３回生	２０	36.4
４回生	１７	30.9
合計	５５	100.0

回答者の属性を表１及び表２に示す。

表１から回答者の性別は女性が７割強を占めていることがわかる。これは本学障害児教育教員養成課程の学生比率が反映されている。

また、表２からは、２回生以上の各学年からほぼ均等に人数が得られていることがわかる。表２において、１回生が対象に含まれていないのは、今回の調査が５月から６月にかけて行われており、１回生の場合には、「入学後の就職志望」の変化に関する項目等への回答を行うには、大学での講義受講の経験等が浅く、対象に含めることが不適切であると判断したからである。

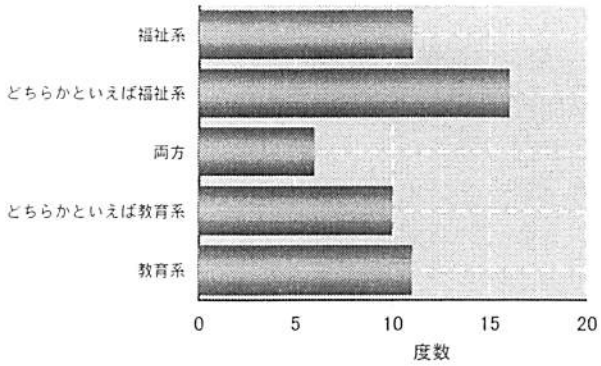

図1 大学選択時の志望学部

3)大学入学前に志望していた学部と進学の理由

大学への入学前に志望していた学部について、特に教育系学部と福祉系学部への進路志望について問うたところ、「福祉系」及び「どちらかといえば福祉系」の希望者(27名)が「教育系」及び「どちらかといえば教育系」の希望者(21名)を上回っていた。おおむね人数的には拮抗していたものの、本学障害児教育教員養成課程に在籍する学生においては、福祉系を志望する者が相当数にのぼっていることが明らかとなった(図1)。

表3 教育系の大学に進学した理由(福祉系大学希望)—複数回答(N=27)

回答の内容	度数	対反応 %	対ケース %
教育大学でも福祉のことが学べると考えた	18	45.0	66.7
入学試験の科目が受験しやすかった	7	17.5	25.9
この大学しか合格しなかった	9	22.5	33.3
「教育系」の仕事も魅力的だった	5	12.5	18.5
その他	1	2.5	3.7
合計	40	100.0	148.1

表4 福祉系の大学への進学に対する考え(教育系大学志望者)—複数回答(N=21)

回答の内容	度数	対反応 %	対ケース %
入学試験の科目があえば福祉系大学も受験した	2	8.0	10.0
福祉系大学に進学しても教員になりたいと考えていた	11	44.0	52.4
もっと福祉系大学に関する情報があれば進学を考えた	5	20.0	23.8
福祉系大学への進学や福祉系の仕事は全く考えなかった	6	24.0	28.6
その他	1	4.0	4.8
合計	40	100.0	119.6

福祉系の学部を志望していた者が本学障害児教育教員養成課程に進学した理由を問うた結果を表3に示した。これによれば、「教育大でも福祉が学べると考えた」者がケース数に対して約7割近くを占めていた。障害児教育教員養成課程は、障害をもった子どもや成人に関する様々な学習が行われるところであるという認識から、「福祉」に関する学習も行えると考えていた学生が多いことが推測された。

また、表4は入学前から教育学部への進学を志望していた学生を対象に、福祉系の学部への進学についてどのように考えていたのかを問うた結果を示したものである。

これによれば、「福祉系の大学に進学しても教員になりたいと考えていた」学生が半数を占めていることが明らかとなり、教職への志望を強くもっていたことが理解できた。

なお、教育系の学部または福祉系の学部以外の学科を志望していた学生が１８名(32.7%)おり、彼らが志望していた学部を具体的に問うたところ、医学系や文学系（含む心理学）の学部があげられていた。

4)大学入学前の志望職業と入学後の志望職業

a.大学入学前の志望職業

大学入学前の志望職業を表５に示した。

表５　入学前の職業志望の強さ

	平均値	ＳＤ
福祉施設指導員	3.51	1.10
盲・聾・養護学校教員	3.41	1.11
小学校教員	3.35	1.41
児童相談所心理判定員	2.98	1.12
公務員（福祉行政職）	2.96	1.07
幼稚園教員	2.41	1.17
民間企業その他	2.41	1.30
中学校教員	2.22	1.13

表５は、各職業について、「なりたかった」～「なりたくなかった」までを５段階で評定させたものである。従って、平均値が５点に近いほど、志望が強いことを示している。

これによれば、志望の強かった職種は順に「福祉施設指導員」、「盲・聾・養護学校教員」、「小学校教員」であった。反対に「中学校教員」や「幼稚園教員」、「民間企業その他」への志望は弱かったことが明らかとなった。

これらの職業の中で、大学に入学する以前の時点で、「もっともなりたかった仕事」を一つだけ選んでもらったところ、表６のようになった。

表６　入学前に最もなりたかった職業

	度数	%
小学校教員	１３	25.5
盲・聾・養護学校教員	１０	19.6
福祉施設指導員	９	17.6
民間企業その他	９	17.6
公務員（福祉行政職）	５	9.8
幼稚園教員	４	7.8
中学校教員	１	2.0
児童相談所心理判定員	０	0.0
合計	５１	100

これによれば、もっとも希望の多かった職業は、「小学校教員」であり、ついで「盲・聾・養護学校教員」、「福祉施設指導員」及び「民間企業その他」の順であった。

大学への入学前の時点で、小学校教員と盲・聾・養護学校教員への志望とともに、福祉施設への就職を第一の志望進路としてあげていた学生が多かったことが印象的であった。

なお、「民間企業その他」への志望も頻度として高ったが、これは医療福祉系の職業への志望者がその多くを占めていた。

b. 現在の志望職業

現在の志望職業を表7に示した。

表7　現在の職業志望の強さ

	平均値	SD
盲・聾・養護学校教員	3.65	1.08
小学校教員	3.64	1.26
福祉施設指導員	3.28	1.14
公務員（福祉行政職）	3.14	1.18
児童相談所心理判定員	2.98	1.13
幼稚園教員	2.76	1.18
民間企業その他	2.61	1.40
中学校教員	2.40	1.28

表8　現在最もなりたい職業

	度数	%
盲・聾・養護学校教員	14	26.4
小学校教員	13	24.5
民間企業その他	11	20.8
福祉施設指導員	6	11.3
公務員（福祉行政職）	6	11.3
幼稚園教員	2	3.8
児童相談所心理判定員	1	1.9
中学校教員	0	0.0
合計	53	100

表9　現時点で教職を志望しない理由

複数回答（N=20）

	度数	%
教職の魅力が乏しい	4	20.0
「教員」の採用数が少ないため	9	45.0
自分には向いていないと感じたから	11	55.0
もともと他職種を志望していたため	8	14.5

表7は、表5と同様に、各職業について、志望の強さを5段階で評定させたものである。

これによれば、入学前に志望の強かった「福祉施設指導員」がやや弱くなり、「盲・聾・養護学校教員」及び「小学校教員」への志望がより強くなる傾向が確認された。

「中学校教員」への志望は依然として弱かったが、「民間企業その他」への志望はわずかに強まる傾向がみられた。

先ほどと同様に、これらの職業の中で現在の時点で「もっともなりたい仕事」を一つだけ選んでもらったところ、表8のようになった。

もっとも希望の多かった職業は、「盲・聾・養護学校教員」であり、入学前にもっとも志望の強かった「小学校教員」を上回った。「福祉施設指導員」への志望はその分相対的に弱まっていることがわかった。

また「民間企業その他」を第一志望とした2割ほどの学生たちは、医療福祉系の職業への志望者がその多くを占めていた。

なお、表外になるが入学前と現在の志望職種の関係を見ると、入学前に教員志望だった学生の約2割が福祉系の職種に志望を変化させたのに対し、福祉系から特殊教育諸学校教員への志望の変化はあったものの幼・小・中学校教員へ志望を変化させたものはいなかったこともわかった。

c. 教職を志望しない理由

現時点で教職を志望していないものにその理由を問うたところ、「自分には向いていないと感じた(55%)」「採用数が少ない(45%)」との回答が多かった（表9参照)。

5)就職に対する意識

就職に向けた現在の意識について、１０項目からなる質問への回答結果を因子分析した結果、「福祉職への就職支援への希望」、「適性・適職を模索」、「採用試験への要望」の３因子に集約された(累積寄与率71.4%)。この結果を表１０に示す。

表10　就職に対する現在の意識に関する因子分析の結果

	因子		
	1	2	3
福祉系職種の就職情報を紹介してもらいたい	.978		
福祉系職種の仕事内容の詳細を知りたい	.935		
福祉系職種への進路指導を充実させてほしい	.926		
福祉系職種の就職対策セミナーを実施してもらいたい	.906		
自分の仕事における適性が見つけられない		.850	
将来の進路を決められずに悩んでいる		.731	
卒業生の体験談を聞きたい		.563	
教員採用試験対策を充実してほしい			.865
教員採用数の拡大を大学から各自治体に働きかけてほしい			.842
教員を志望しているが採用数が少なく不安			.440

バリマックス法による回転後の因子行列

表１０における各項目の素点は次のようであった。各項目について、「大変そう思う」～「全くそう思わない」までの５段階尺度で問うた結果を表１１に示した。

表11　就職に対する現在の意識

	平均	ＳＤ
教員採用数の拡大を大学から各自治体に働きかけてほしい	4.24	1.02
福祉系職種の仕事内容の詳細を知りたい	4.09	1.15
福祉系職種の就職情報を紹介してもらいたい	4.06	1.11
卒業生の体験談を聞きたい	4.02	.92
福祉系職種への進路指導を充実させてほしい	3.93	1.03
福祉系職種の就職対策セミナーを実施してもらいたい	3.93	1.06
教員採用試験対策を充実してほしい	3.91	.98
教員を志望しているが採用数が少なく不安	3.80	1.43
将来の進路を決められずに悩んでいる	3.44	1.40
自分の仕事における適性が見つけられない	3.35	1.31

表１１によれば、「教員採用数の拡大を大学から各自治体に働きかけてほしい」という項目に続き、「福祉系職種の仕事内容の詳細を知りたい」、「福祉系職種の就職情報を紹介してもらいたい」といった福祉系職種への就職に関する内容への希望が強いことがわかった。表１０に示した各因子ごとにみてみると、「福祉職への就職支援への希望」に関しては「仕事内容の詳細を知りたい」といった具体的な内容への要望が強く、「適性・適職を模索」では「卒業生の体験談」を強く求め、「採用試験への要望」では「大学から自治体へ採用枠の拡大を働きかけてほしい」ことへの要望が強かった。

「卒業生の体験談を聞きたい」という声は、教育系大学の卒業生が教職以外の職業に就職するにあたってどのような活動を行ったのかを具体的に知りたいという希望が調査用紙末の自由記述での回答欄に寄せられていたことからも把握できた。

6)どのような性格の仕事に就きたいと考えているか

卒業後にどのような性格の仕事に就きたいかについて、２０の質問からなる項目を因子分析した結果を表１２として示した。

全体に、対人業務を中心にした仕事、他者と共同で進める仕事への希望が強かった。他方で、自分一人で進める仕事や、文書作成や書類整理などへは希望が低かった。

「子どもと関わりのある仕事」「チームを組んで行う仕事」「創造的な仕事」など20項目からなる質問に対する回答を因子分析したところ、「前進性」「集団性」「勤務条件」「非対人・非創造」「対人」「身体的活動」「小規模・非専門」の７因子に集約された(累積寄与率73.3%)。

表12　就きたい仕事の性格に関する因子分析

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
仕事の内容が創造的な仕事	.781						
いろいろな人との出会いのある仕事	.741						
新しい企画を考えたり推進したりする仕事	.702						
他者をかげからサポートする仕事		.832					
周囲と助け合いながら進める仕事		.699					
チームを組んで行う仕事		.669					
仕事以外でも個人的なつながりが持てるような仕事		.643					
家族的な雰囲気の職場である仕事		.600					
収入の安定している仕事			.927				
休日がきちんと定められている仕事			.897				
仕事の内容が固定的な仕事				.859			
コンピュータやワープロで文書や表を作成したり整理したりする仕事				.663			
自分一人で進める仕事				.547			
全体をまとめる仕事				.542			
障害をもった人と関わりのある仕事					.903		
子どもと関わりのある仕事					.762		
人にアドヴァイスをしたり教える仕事						.813	
体を動かしながらする仕事						.664	
専門性を活かした仕事							-.766
組織の規模の小さな仕事							.650

バリマックス法による回転後の因子行列

また、表１２における各項目の素点は次のようであった。各項目について、「大変そう思う」～「全くそう思わない」までの５段階尺度で問うた結果を表１３に示した。

特に就きたい仕事の性格として得点の高かった項目は、「いろいろな人との出会いのある仕事」や「子どもと関わりのある仕事」といった対人関係の仕事に関する内容があげられていた。ついで、収入の安定性や専門性、障害をもった人との関わり等の項目が重視されていた。

他方、自分一人で進める仕事や、仕事の内容が固定的な仕事等への希望は弱かった。

表13　就きたい仕事の性格

	平均	SD
いろいろな人との出会いのある仕事	4.63	.65
子どもと関わりのある仕事	4.45	.74
収入の安定している仕事	4.25	.84
専門性を活かした仕事	4.17	.84
障害をもった人と関わりのある仕事	4.15	.80
仕事以外でも個人的なつながりが持てるような仕事	4.13	.96
周囲と助け合いながら進める仕事	4.11	.84
家族的な雰囲気の職場である仕事	4.04	.87
休日がきちんと定められている仕事	4.04	1.06
仕事の内容が創造的な仕事	3.96	.90
体を動かしながらする仕事	3.65	1.00
人にアドヴァイスをしたり教える仕事	3.59	.84
チームを組んで行う仕事	3.55	.81
他者をかげからサポートする仕事	3.50	.80
新しい企画を考えたり推進したりする仕事	3.22	1.19
全体をまとめる仕事	2.96	.82
組織の規模の小さな仕事	2.74	.85
仕事の内容が固定的な仕事	2.44	.72
コンピュータやワープロで文書や表を作成したり整理したりする仕事	2.37	1.00
自分一人で進める仕事	2.22	.92

7)就職にあたっての準備

表１１においては、就職にあたって大学に対して、情報提供等を強く求める結果が示されていた。また、表１３では、就きたい仕事の性格に関して、専門性を活かしたい等の希望が示されていたが、それでは実際に就職へ向けた準備は各学生において、どのように行われているのであろうか。

表１４は、就職にあたって、現時点でどのような準備をしているのかに関する１０項目について、各学年ごとに整理したものである。

これをみると、全体に就職に向けての準備活動が著しく遅いことが顕著に明らかとなった。全体的な傾向として、具体的な勉強やその他の準備を開始するのはおおむね３回生以降であり、本格的に取り組むのは４回生になってからである傾向がうかがえた。また、情報収集の遅れも顕著で、大学内で行うことができるもっとも身近な就職資料室や就職課への相談さえもあまりしていないという問題点が明らかとなった。

とりわけ、４回生の６月という時期になっても、就職試験に必要な勉強さえ始めていない学生や、試験科目等についても調べていない学生がおり、さらに、関連する説明会等への参加に至っては、各学年ともほとんどのものが不参加という結果となっており、就職準備に対する甘さともいえる状況が浮き彫りとなった。

これは、就職に向けての大学に対する要望が極めて強かったことを勘案すれば、周囲へ

の要望は強いものの、実際に自身での準備において努力が不足している実状に対する指導が必要であろう。

ただし、こうした学生側における要因ばかりをとりあげて、対応を行っても、事態が直ちに改善するわけではない。それは、障害児教育教員養成課程の第一の目的である特殊教育諸学校教員の養成に照らして、当面の各都道府県における採用予定数が極めて少ない状況が、教員への就職への動機を下げている事実が厳然として存在しているからである。

また、これまで学生の進路指導は、入学後早い段階から、各学年ごとに体系的な枠組みをもって実施されてきたとはいえず、今後の対応においてはこうした実状を学生指導における課題として十分に認識しておく必要がある。

表14　就職に向けての現在の準備状況

質問の内容	準備状況	2回生	3回生	4回生
就職試験に必要な勉強を始めている（問題集・通信教育など）	はい	0	6	12
	いいえ	18	14	5
様々な仕事の内容について調べている（独自の情報収集）	はい	1	7	3
	いいえ	17	13	14
採用試験の試験科目等について具体的に調べた	はい	2	5	11
	いいえ	16	15	6
すでに就職している先輩の話を聞いた	はい	5	6	10
	いいえ	13	14	17
教育委員会や社会福祉協議会の説明会に参加したことがある	はい	0	0	5
	いいえ	18	20	12
新聞は毎日読んでいる	はい	5	8	13
	いいえ	13	12	4
社会常識や基本的なマナーは理解している	はい	6	7	11
	いいえ	12	13	6
社会問題や時事問題はおよそ理解している	はい	5	4	4
	いいえ	13	16	13
学生課の就職資料室に調べにいったことがある	はい	0	1	10
	いいえ	18	19	7
学生課に相談に行ったことがある	はい	0	1	1
	いいえ	18	19	16

※表中の各数字は当該の学生数を示す

V．まとめと課題

就職に向けた意識の中では、学生たちが採用数の拡大や職業紹介、職業指導といった支援を大学に強く求めている傾向が明らかにされたが、その一方で、就職に向けた活動の実態からは、学生自身の消極的な準備姿勢も明らかとなった。

たとえば今回の調査対象の学生から希望の強かった「卒業生の体験談を聞きたい」といった声に関しては、すでに教職に就いている卒業生を招いて、採用試験の準備をどのように行っていたのかなどの体験を語ってもらう機会が用意されている。さらに、教育委員会からも講師を招いて教職志望の学生に対する講演会を実施し、採用の傾向を把握する機会も用意されているが、いずれも毎回、十分な参加者が集まらないという実態がある。今回の調査において、卒業生の体験談や教育委員会の講演を聞いたことがないという学生が多かった結果が示されたことは、まさにこうした実態と直接的な関係がある。就職に向けた準備の中で、体験談や講演を聞く機会に関する情報を周知させるとともに、こうした機会の重要性を十分に認識させるような学生への働きかけが必要であろう。

さて、教職への適性に対する不安や志望が定められず悩んでいる学生が多いことも明らかとなったが、これは進路に向けた準備において、具体的な目標を定めた取り組みが遅れていることの一つの原因であろう。

子どもたちの生き方にかかわる職業としてどのような教師像を意識するのか、子どもたちのどのような将来を意識するのかといった基本的な点から深く考え、自らの職業意識を高めていく教育が求められているといえよう。

障害児教育教員養成課程に在籍する学生たちの中で特殊教育諸学校教員を志望するものが入学時よりも増加してきていることは、本養成課程としての役割が機能していることの現れであろうが、上述してきたように、具体的な準備に関しては致命的ともいえるほどにその開始や準備内容が不十分であり、職業意識の涵養とともに、なお一層の指導体制の充実が課題であると認識させられる結果となった。

本研究の主題である福祉系職業への志望者が毎年一定の割合でいることが確認されたが、彼らに対する就職支援は、就職情報の提供にとどまっているのが実状である。

施設指導員をはじめとする福祉系職業を志望する学生を視野においた学習内容の構成を教育課程に系統的に盛り込むことができるようにすることも今後の課題となろう。

註

1) 大阪府財政再建プログラム(1998)では、大阪府及び大阪市の小学校教員の採用数の将来見込みが示されているが、平成１１年度から１３年度までは教員数を毎年１００以上減少させることが示されており（前年度比：平成11年度→400減；平成12年度→340減；平成13年度→130減；それ以降は７年間で400増)、教員志望者にとっては非常に厳しい時期がつづく。なお、大阪府及び大阪市では特殊教育諸学校教員の別枠採用を行っていないため、本課程の卒業生のほとんどは小学校教員採用の枠で受験している。

2) たとえば施設内での活動プログラムの計画などにおいて、各利用者ごとの活動を細かく準備することや社会活動に関する個別的配慮などに表れているようである。

Desire for Finding Employment at Social Welfare Area of Students on School for Education for Special Teacher

Tomomi SANAGI* · Mayu CHIKAZAWA**

*Department of Special Education, Osaka Kyoiku University, Osaka
**Ajisai-en, Rehabilitation Institution for person with mental retardation, Kochi

On this study, auther presented the data for guidance that for students who are seeking for his/her job after graduating from the university. The purpose of the study was to explore what was reason of student's desire for job on social welfare.

The questionnaire which was consisted of five area (1. desire for the type of occupation a. before entrance into the university. b. at present time) ; 2. view of finding his/her employment ; 3. favorable features of jobs ; 4. desire for support for finding employment from the university ; 5. preparation for finding employment).

55 students who were belonging to secondary to forth grade were join our investigation.

The following results were obtaind :

1. Many students had wanted to enter a faculty of social welfare.
2. Favorable job of students were teacher of special schools, teacher of primary schools, and worker of social welfare.
   (students who want to become teacher of special schools have gradually in creased)
3. Favorable features of job were that closely personal relations especially with children, stability on income, and expertise of the job.
4. Desire for the university were that ask the education authorities for employment of teacher and guidance for finding job.
5. Students preparation for his/her finding employment by himself/herself were very insufficient.

Finally, I suggested necessity to set up an opportunity that we should make students think about their future since an early school year for students.

〈資料：調査用紙〉

調査へのご協力のお願い

この調査は、教員養成系の大学に在籍するみなさんを対象に、「福祉系」の仕事と「教育系」の仕事への志望の意識をお伺いするものです。質問は、いずれの項目も簡単なチェックをしていただくか、空欄を埋めていただく形式で構成されています。
お手数をおかけいたし恐縮ですが、よろしくご協力くださいますようお願い申しあげます。
なお、本調査の結果は統計的に処理し、個別にご迷惑をおかけすることはございません。

1．該当する欄に○印またはご記入ください

1)あなたの性別・年齢　　男性　　女性
2)所属学年　　回生
3)所属学科　　障害児教育教員養成課程　　それ以外
4)大学入学前に「教育系」と「福祉系」のいずれの学科を志望していましたか　・・・・・　教育系　どちらかといえば教育系　両方　どちらかといえば福祉系　福祉系

→a.「福祉系」「どちらかといえば福祉系」を希望していた方にお伺いします

なぜ、「教育系」の大学に進学したのですか。
あてはまる項目すべてに○印をつけてください。

(　　) 教育大学でも福祉関係のことが学べると考えたから
(　　) 入学試験の科目が自分の受験しやすい科目だったから
(　　) この大学しか合格しなかったから
(　　) 「教育系」の仕事も魅力的だったから
(　　) その他（具体的に:　　）

→b.「教育系」「どちらかといえば教育系」を希望していた方にお伺いします

大学進学時に「福祉系」の大学への進学についてどのように考えましたか。
あてはまる項目すべてに○印をつけてください。

(　　) 入学試験の科目が自分の受験しやすい科目ならば「福祉系」も受験した
(　　) 「福祉系」の大学に進学しても「教員」になりたいと思っていた
(　　) もっと「福祉系」の大学に関する情報があれば進学を考えたと思う
(　　) 「福祉系」の大学への進学や「福祉系」の仕事は全く考えなかった
(　　) その他（具体的に:　　）

5)「教育系」大学または「福祉系」大学以外の進路を考えていましたか　・・・・・　はい　いいえ
→「はい」と答えた方　具体的にお教えください　例:医学部、心理学科など（　　）

2．あてはまる箇所に○印またはご記入ください

1)大学入学前に希望していた将来の仕事は何でしたか

	なりたかった	できればなりたかった	どちらともいえない	あまりなりたくなかった	なりたくなかった
a.小学校教員					
b.幼稚園教員					
c.中学校教員					
d.盲・ろう・養護学校教員					
e.公務員（福祉行政職）					
f.福祉施設指導員					
g.児童相談所心理判定員					
h.民間企業・その他 （具体的: ）					

1)-7　1)の中でもっともなりたいと考えていた仕事は何ですか
a～hの中から記号を選んでご記入ください　（　　）

2)現時点で希望している将来の仕事は何ですか

	なりたい	できればなりたい	どちらともいえない	あまりなりたくない	なりたくない
a.小学校教員					
b.幼稚園教員					
c.中学校教員					
d.盲・ろう・養護学校教員					
e.公務員（福祉行政職）					
f.福祉施設指導員					
g.児童相談所心理判定員					
h.民間企業・その他 （具体的: ）					

2)-7　2)の中でもっともなりたいと考えている仕事は何ですか
a～hの中から記号を選んでご記入ください　（　　）

2)-イ　現時点で「教員」を志望していない人にお尋ねします

「教員」を志望しない理由であてはまるものすべてに○印をつけてください

(　　) 教職の魅力が乏しいため

(　　) 「教員」の採用数が少ないため

(　　) 自分には向いていないと感じたから

(　　) もともと他職種を志望していたため

→ (いずれか○印)　福祉職志望　その他 (具体的:　　)

(　　) その他 (具体的:　　)

2)-ウ　「福祉」関係の職種を志望している人にお尋ねします

具体的な理由を教えてください。

[福祉職を志望する具体的な理由：　　]

3．就職に向けた現在の考えをお聞かせください

	大変そう思う	まあそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	全くそう思わない
1)将来の進路を決められずに悩んでいる					
2)「教員」を志望しているが採用予定数が少なく不安					
3)教員採用数の拡大を大学から各自治体に働きかけてほしい					
4)教員採用試験対策を充実させてほしい					
5)卒業生の体験談を聞きたい					
6)福祉系職種の「仕事内容」の詳細情報を知りたい					
7)様々な福祉系職種の「就職情報」を紹介してもらいたい					
8)福祉系職種の就職対策セミナーを実施してもらいたい					
9)自分の仕事における適性が見つけられない					
10)「福祉系」職種への進路指導を充実させてほしい					

4．どのような性格の仕事に就きたいとお考えですか

	大変そう思う	まあそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	全くそう思わない
1)子どもと関わりのある仕事					
2)障害をもった人と関わりのある仕事					
3)いろいろな人との出会いのある仕事					
4)人にアドヴァイスをしたり、教える仕事					
5)専門性を生かした仕事					
6)仕事の内容が創造的な仕事					
7)全体をまとめる仕事					
8)コンピュータやワープロで文書や表を作成したり整理したりする仕事					
9)周囲と助け合いながら進める仕事					
10)仕事以外でも個人的なつながりがもてるような仕事					
11)自分一人で進める仕事					
12)新しい企画を考えたり、推進したりする仕事					
13)組織の規模の小さな仕事					
14)休日がきちんと定められている仕事					
15)収入の安定している仕事					
16)家族的な雰囲気の職場である仕事					
17)仕事の内容が固定的な仕事					
18)チームを組んで行う仕事					
19)他者を陰からサポートする仕事					
20)体を動かしながらする仕事					

5．就職にあたって、現時点でどのような準備をされていますか

1)就職試験に必要な勉強をはじめている（問題集・通信教育など）・・・・　はい　いいえ
2)様々な仕事の内容について調べている（情報収集）　・・・・・・・・・　はい　いいえ
3)採用試験の試験科目当について具体的に調べた　・・・・・・・・・・・　はい　いいえ
4)すでに就職している先輩の話を聞いた　・・・・・・・・・・・・・・・　はい　いいえ
5)教育委員会や社会福祉協議会の説明会に参加したことがある　・・・・・　はい　いいえ
6)新聞は毎日読んでいる　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　はい　いいえ
7)社会常識や基本的なマナーは理解している　・・・・・・・・・・・・・　はい　いいえ
8)社会問題や時事問題はおよそ理解している　・・・・・・・・・・・・・　はい　いいえ
9)学生課の就職資料室に調べに行ったことがある　・・・・・・・・・・・　はい　いいえ
10)学生課に相談に行ったことがある　・・・・・・・・・・・・・・・・・　はい　いいえ

6．就職または進路の決定にあたっての不安や教職や福祉職への就職に関する希望など、自由にご意見をお聞かせください

調査へのご協力、まことにありがとうございました